



日本における 「インフルエンシャル プレイヤー」を目指して

フォルクスワーゲン グループ ジャパン株式会社
代表取締役社長

梅野 勉

フォルクスワーゲンは今年6月、我が国で販売されている輸入ブランド車としては、初めて累計輸入100万台を達成することができました。

これは、1953年にビートルの日本への輸入が始まって以来、多くの日本のお客様から、長年にわたってお寄せいただいた「信頼の証」であると受けとめております。

販売台数においても、現在までに5年連続輸入車販売台数No.1を継続中であり、コアモデルであるゴルフも11年連続で輸入車モデル別販売台数No.1(自社調べ)と、多くのお客さまにご愛顧いただいております。

近年フォルクスワーゲンは、「自動車の価値のベンチマークとなる(Benchmark for Automobile Value)」というビジョンの下に、従来の小型車を中心とする製品ラインアップから、高級SUVやミニバンなど、より幅広いセグメントに進出し、ラインアップを拡充して参りました。これは、単に取扱車種を増やしたり上級セグメントに進出するだけでなく、「それぞれのセグメントでベンチマークとなるクルマ」を提供し、多様化するお客様のニーズに幅広くお応えしていくということです。

これを私たちは、フォルクスワーゲンの「ブランド変革」と呼んでいます。

それぞれのセグメントのお客様からフォルクスワーゲン車への圧倒的な支持をいただくためには、「安全

性」、「実用性」、「信頼性」といったフォルクスワーゲンの本来の価値を高めていくだけでなく、お客様のエモーションに訴えるような若々しく魅力的なスタイリングや、革新的な技術に裏付けられたダイナミックな走行性能を備えたクルマを提供していく必要があります。

“Aus Liebe Zum Automobile=クルマへの熱い想いを、あなたに”という企業スローガンは、このような決意を表したものであり、全世界で大変な支持をいただいている新型ゴルフGTIは、まさにその代表的な存在といえるでしょう。

さて、日本の自動車市場は、北米や欧州など海外での躍進が著しい日本車メーカーのホームグラウンドであり、高品質で充実した装備、多様化したセグメントにおける高い価格競争力を備えた日本車が多数ひしめきあっています。

こうした中で、輸入車の多くは、ライフスタイルやステータスを示すものとして存在意義が高く、諸外国と比べても大変ユニークな市場環境と言えます。強力な日本車メーカーのお膝元で苛烈な販売競争を強いられる純輸入車の登録台数は、1998年以来、年間25万台前後で推移しており、如実にその厳しさを表しています。



ゴルフトゥーラン



トゥアレグ

しかし、視点を変えてみれば、このユニークな市場で輸入車の果たすべき課題や販売拡大のチャンスはまだ大いに残されているともいえます。

特に今年は、レクサスが新規参入するなど、ブランドの価値やライフスタイル商品としての魅力でユーザーに認めてもらおうとする輸入車にとっても、大きなビジネスチャンスといえるでしょう。

フォルクスワーゲン グループ ジャパンでは「日本でインフルエンシャル プレイヤーになる」、すなわち、仕事の質やプロセスで日本の自動車業界のベンチマークになるという目標を掲げ、2000年から様々な企業活動に取り組んできました。

最初のステップとして、2001年から企業姿勢や開発哲学を訴えた企業広告シリーズを実施したのち、第2段階では、高級SUV「トゥアレグ」やコンパクトミニバン「ゴルフ トゥーラン」など、新しいセグメントに新型車を投入することで「ブランド変革」を形にしてきました。

さらに、全国の正規ディーラーに「フォルクスワーゲン ディーラーズスタンダード」を導入し、統一された新しい

店舗CIと販売プロセスを通して、お客様が全国どこでも均一で質の高いサービスを受けられる体制を強化しております。

お客様には購入時からアフターサービスに至る全ての期間で、フォルクスワーゲンの最高の「総合的所 有体験(total ownership experience)」を通して、フォルクスワーゲン ブランドの価値を体験いただき、弊社の企業目標の一つである「買いたいブランドNo.1」を実現することを目指しています。

ポストバブルの1990年代半ばに「輸入車の夜明け」と言われてからすでに久しく、純輸入車を取り巻くビジネス環境も大きく様変わりしてきました。

日本経済もようやく踊り場を脱し、今年秋以降、本格的な活性化が期待されている自動車市場では、お客様が真のブランド価値に目覚め、輸入車に対する関心が今まで以上に高まるであろうと予想されます。

私どもフォルクスワーゲンでもこの機を境に、今まで以上にお客さまにお選びいただき、勝ち残れるブランドになれるよう、一層の努力を重ねて参りたいと思います。